

地域住民と行政による小川の自然再生 その2 広沢川における「ふるさとの川づくり事業」の記録

Proceeding of collaborative river restoration in Hirosawa river

山本大輔・吉橋久美子

Daisuke YAMAMOTO and Kumiko YOSHIHASHI

要 約

猿投町を流れる広沢川で、地元発意により「ふるさとの川づくり事業」が行われた。猿投町まちづくり協議会が行政と一体的に、こどもが遊べる川を目標にして、川遊びや川づくり学習会等で繰り返し川と関わることにより、身近な川への関心や保全意識が向上し、水辺愛護会を設立するまでに至った。今後は、川づくり活動の継続や、猿投山やトロミル水車のような地域資源の活用による広沢川を介した更なる地域愛着の醸成が期待される。

キーワード：水辺の小さな自然再生，多自然川づくり，川遊び，住民参加，地域愛着

1. はじめに

豊田市では、地域住民の手による身近な小川の自然再生を通して地域の自然への愛着を醸成し、市民と行政が共働で自然豊かな川づくりを実施する「ふるさとの川づくり事業」が行われている（豊田市ホームページ）。2015年度から2020年度にかけてモデル事業が行われた岩本川では、住民にあまり意識されていなかった河川への関心が高まり、河川内の草刈りや石組み等の河川の日常的な維持管理が、地域住民主体で行われるようになった（吉橋・山本，2019）。その後、岩本川は小学校の授業で継続して活用されるようになり（吉橋・山本，2020，2023），地域に愛される川となっている。

2019年度には、ふるさとの川づくり事業の横断的な展開を図るために、豊田市役所の広報媒体である広報とよた及び豊田市公式ホームページを使って、本事業に取り組みたい地域を募集した。その結果、猿投町まちづくり協議会の会長から応募があり、ヒアリングや自治区との調整を経て、広沢川での事業実施が決定した。本稿では、ふるさとの川づくり事業の2河川目となった広沢川での取組を報告するとともに、岩本川での取組との相違点を述べる。

2. 調査地と方法

広沢川は、豊田市猿投町を流下する、矢作川の二次支流である（図1）。猿投山（標高629 m）を源流として、

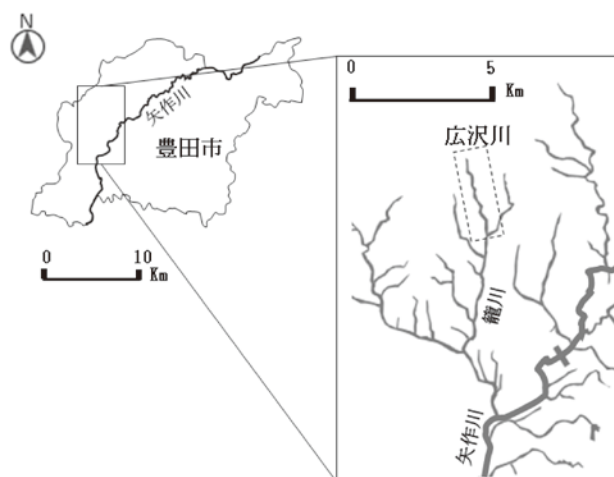


図1 位置図.

同じく猿投山から流れ出る驚取川と合流し、籠川を経て、矢作川に注ぐ。猿投山は、豊田市及び愛知高原国定公園の北西部に位置しており、古くから霊山として崇められ、豊田市内外から多くの人々が訪れる（豊田市役所地域振興部猿投支所，2017）場所である。広沢川の流路延長は5,480 mで、上流側が普通河川（4,212 m），下流側が準用河川（1,268 m）である。普通河川の区間には、広沢天神，猿投七滝そして菊石と呼ばれる球状花崗岩（国指定天然記念物）等の名所がある。準用河川広沢川では、2003年度から2012年度にかけて、拡幅，護岸の緩傾斜化といったいわゆる多自然（型）川づくりが行われた。この河川改修の前には、豊田市矢作川研究所による自然環境調査や近隣住民への聞き取り調査（豊田市矢作川研究所，2003）が行われている。

今回のふるさとの川づくり事業では、準用河川広沢川のうち、下流側約 600 m（丸子橋付近から籠川合流部まで）を事業対象区域とした。この区域はすべて猿投自治区内であり、河川の勾配が緩く、周囲に人家が多い場所である。事業期間は 2020 年度から 2024 年度までの 5 年間で、取組の内容は岩本川での事例（吉橋・山本，2019）を参考にした。まず第 1 段階として、地域住民（猿投町まちづくり協議会会員、沿川住民）と行政（豊田市河川課、豊田市矢作川研究所）が一緒になって、川での「昔」の思い出の共有、「今」の川での自然体験を行ったのちに、川の「未来」の姿を考え、川づくりの目標となる広沢川の未来希望図をとりまとめた。第 2 段階では、川の流れを変化させる石組みや植生の管理等の川づくり学習会や地域の親子向けの川遊びイベントの開催等を継続して行い、川への関心向上を図った。これらの取組と並行して、浚渫や水制工設置などの河川修繕を行政が実施した。

3. 事業の記録

本事業で行った行事、打合せ等の主な取組について付表 1 に示した。各年度の取組について以下に述べる。また、本文では詳しく述べないが、事業調整を行った 2019 年度の取組についても表に記載した。

■ 2020 年度

事業 1 年目は、新型コロナウイルス感染症による世界的な混乱の中で始まった。文部科学省通知による小学校等における全国一斉の臨時休業の要請（令和 2 年 2 月 28 日付け元文科初第 1585 号）、そして感染拡大による緊急事態宣言（愛知県では 4 月 16 日～5 月 25 日）で、不要不急の外出や他人との接近が制限され、矢作川研究所でも職員を 2 グループに分けて勤務する部屋を分けたり、対面打合せを控えたりと未曾有の事態への対応に迫られた。

事業の窓口である猿投町まちづくり協議会との打合せが実施できたのは 7 月になってからだった。初回の打合せでは、事業スケジュールを協議し、岩本川では 1 年で終えた計画作成の期間を 2 年間とることに決定した。これは、本事業の第 1 段階である未来希望図作成にあたり、昔の思い出を共有したり、未来の姿を考えたりするためには、複数人が集まり、対面でのワークショップを何回か行う手法が地域愛着の醸成に有効であると考えたからである。また、次の打合せ時点（7 月中旬）では感染者

数がやや落ち着いていたことから、8 月に川の「今」を体験する川遊びイベント、11 月に昔の思い出を語るワークショップを行うことにした。

□ 川遊びイベント「大人だけの広沢川探検」 2020 年 8 月 16 日 参加者約 10 人

親子向けの川遊びイベントを実施するため、猿投町まちづくり協議会から地域の子も会を介して募集をかけたところ、多数の参加申込があった。しかし、7 月末には新型コロナウイルスの感染者数が再び増加したことでイベント自粛ムードが高まり、子どもたちへの感染リスクを避けるため、親子の参加は中止とし、猿投町まちづくり協議会と矢作川研究所の大人だけの有志数人で広沢川を探検した。広沢川探検では、胴長や長靴を履いて川の中を歩いたり、タモ網で水生生物を捕まえたりしながら、参加者への聞き取りを行った。

その結果、事業対象区域は昔の子どもにとってあまり遊ぶ場所ではなかったことが分かった。例えば、矢作川研究所研究員からの「子どものころ、川で遊んでいましたか」という問いかけに対して、

「ここは遊ばんね、もうちょっと下のほうで魚採ってたもんでね。」

「昔、この下に堰堤があったじゃないですか。あの下ぐらいからですよ。」

「合流するあたりとか。」

「グリーンロードの下あたりが多かったね。50 年も前。」

「このへん竹やぶだったもんで、来る場所じゃなかった。」

といった会話が展開された。一方では、

「今年は例年よりずっと水が多い。」

「いつもだったら長靴いらんくらい。」

「これだけ水量があって、もうちょっと魚が多けりゃ、遊ぶのにはねえ、いいかも。」

「あれみたいにヨシがいっぱい生えちゃうもんで、川に入れん。」

このような参加者たちの発言から、川のことを気にしている様子が伺えたほか、童心に帰ってガサガサで生き物を捕まえて遊んだことにより、この場所で進めていく川づくりへの期待も感じられた。

コロナ禍で様々な行動が制限される中で、せめて身近な広沢川に想いを馳せ、家族で遊びに行っていきたいと考え、大人だけの広沢川探検の成果として、こうした会話のやりとりのほか、探検の際に撮影した今の川の風景や

捕まえた生き物の写真をまとめた広沢川探検マップ（付図1）を作成した。また、今後のワークショップ開催も中止となる場合に備えて、昔の川の思い出や写真を募集するチラシも作成し、広沢川探検マップと合わせて自治区に回覧し、地域住民への広報を行った。

□ワークショップその1「広沢川の昔の思い出を語ろう」 2020年11月21日 参加者13人

11月にはある程度、人の活動が回復したため、第1回目となるワークショップを予定通り開催することができた。コロナ禍であることを踏まえ、参加者を猿投町まちづくり協議会の会員及び沿川住民という日常的に付き合いのある中高年に限定し、矢作川研究所の職員がコーディネーターを担った。思い出語りは、事業対象区域があまり遊ぶ場所ではなかったことを考慮して、対象エリアを広く設定し、年代の異なる航空写真や猿投町まちづくり協議会の会員から提供された古い住宅地図に各自の思い出を記した付箋を貼り付ける方式で行った。

事業対象区域より広範囲な地図を用意したことにより、川の流れる位置や広沢川と籠川の合流部が現在とは違ったこと、丸太の一本橋やターザンロープ、大人がつくった堰で遊んだ記憶等が様々な思い出として語られた。以下にその会話の一部を紹介する。

「昔、このへんに丸太の一本橋がなかった？今のこの家の田んぼの辺。」

「うちの田んぼの北側にあった。」

「あったね！丸太の一本橋がね。」

「〇〇さん（著者注：個人名のため伏字とした）と
ころに行く橋の辺ね、あの辺が一本橋だった。」

そして、この地域で重要な役割を担った水車についても語られた。

「一番下の水車がね、今の西側橋より南側。」

「何用の？」

「車屋（くるまや）、石粉をつくる。」

「あれは、長くやってみえたね。」

「お寺さんとこの横で、この辺じゃないか。」

「もうひとつ、米つき用の水車がやりましたね。」

「いつぐらいまであったんですか？」

「50年前はあったね。55年ぐらい前かな。」

「米つき場があったっていうのは覚えとらんね。」

「使ってはなかったけど、あったのは覚えてる、探検で入って、薄暗い、クモの巣がいっぱいあった。」

ワークショップに老若男女が参加し、高齢の世代から若い世代へと思い出が共有された岩本川とは異なり、参



図2 ファシリテーショングラフィック。

加者の年齢層が狭かったためか、思い出の語りが会話として継続し、より具体的に語られていた印象を受けた。語られた思い出の時間を共に過ごしていなくても、その思い出ひとつひとつの風景が鮮明に浮かぶようなワークショップだった。このワークショップで語られた内容は、広沢川思い出マップ（付図2）としてまとめ、多くの住民が共有できるよう自治区で回覧した。

■ 2021 年度

事業2年目は、広沢川の将来像となる「未来希望図」の作成に向けて、引き続き地域住民と行政の共働でワークショップ等に取り組んだ。また、地域住民の広沢川への関心向上を図るため、親子向け川遊びイベントの企画や、川づくり通信 vol.1, vol.2 の発行を行った。マスクの着用や3密の回避等といった感染症対策の新しい生活様式にも慣れてきた頃であったが、前年に続き新型コロナウイルス感染症による影響を受けた年であった。

□ワークショップその2「川の未来をみんなで描こう！」 2021年6月26日 参加者15人

2回目となるワークショップでは、広沢川の現状を踏まえたうえで、理想的な未来の姿について意見を出し合うことにした。

まず、猿投町まちづくり協議会の会員を3つのグループに分け、「川の現状（良いところと課題）」「川への希望」



図3 ワークショップの様子。

「自分が川に対してできること」「その他」の4項目について付箋に書き、広沢川の図上に貼りながら、話し合った。グラフィックファシリテーションを活用したワークショップのまとめでは、すべてのグループで「遊べる川」がキーワードとなり、目指す川の方向性として、関係者の共通認識となった。

また、川の良い環境を保つには、草刈り等の日常的な維持管理や、日曜大工的な規模で、川に置き石をしたり、バープ工を設置したりすることで生物の生息環境を多様にする等の小さな自然再生（水辺の小さな自然再生ホームページ）が必要であることについても話題となった（図2）。

□川遊びイベント「広沢川で遊ぼう」 2021年8月22日予定、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

前年度に続き、広沢川の「今」を知り地域住民の関心を向上するために、親子向けの川遊びイベントを企画し、定員いっぱいの申し込みがあった。しかしその頃、新型コロナウイルス感染者数が急増（第5波）し、子ども会からも参加見合わせの連絡が入ったため中止とした。その代わりに矢作川研究所の研究員が広沢川の生き物を採集し、その写真を「広沢川の生き物図鑑 2021ver.」として自治会住民に回覧した。

□ワークショップその3「未来希望図で具体化しよう！」 2021年10月23日 参加者16人

川遊びイベントの中止により、広沢川の「今」を体験できなかったため、広沢川の様子をドローンで上空から撮影した動画と、川の中を歩いて撮影した動画を矢作川研究所が準備し、ワークショップの冒頭で上映した。普段とは違う角度からの広沢川の映像に、参加者である猿

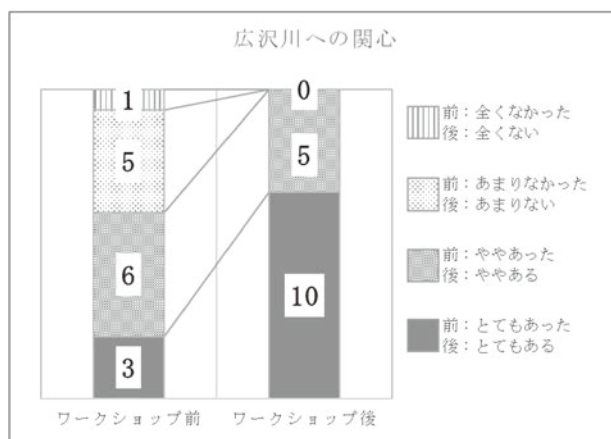


図4 ワークショップ前後の広沢川への関心の変化（n=15）。

投町まちづくり協議会の会員同士の川談義が盛上がった。次に、前回のワークショップで出た意見を地図に落とし込んだものを見ながら、それらの意見への賛意や提案を出し合い、川の活用方法や維持管理方法について話し合った（図3）。

その結果、広沢川を子どもが遊び、大人が憩える、生き物がすみやすい川にするという基本方針が固まった。維持管理については「河川美化（年2回）以外にも草刈りが必要」、「担い手の確保が必要」などの意見が出た。こうした意見をファシリテーターが短文にし、語句の頭文字「かわぐらし」を織り込んだ「人も生き物も生き生き 川ぐらし」が広沢川におけるふるさと川のづくりのテーマとなった。

参加者アンケート（15人回答、40代1人、50代4人、60代1人、70代1人、空欄8人）では、広沢川への関心について、ワークショップ前に「とても関心があった」とした人は3人だったが、ワークショップ後に「とても関心がある」とした人が10人に増えた（図4）。また、川づくりに参加したいか、という問いに対して、「とても思う」と回答した人が約7割、「やや思う」と回答した人が約3割だった（図5）。

以上のワークショップ等での成果として、2022年3月に広沢川の将来像を中心に、歴史、ワークショップの様子、生き物などをA3サイズ1枚（両面）にまとめた「広沢川未来希望図 人も生き物も生き生き 川暮らし」（付図3）を作成し、自治会回覧によって各戸に配布した。

■ 2022年度

事業3年目は、前年度に作成した未来希望図の実現を目指して、猿投町まちづくり協議会の会員を対象にした川づくり学習会や、かつての広沢川にまつわる地域産業

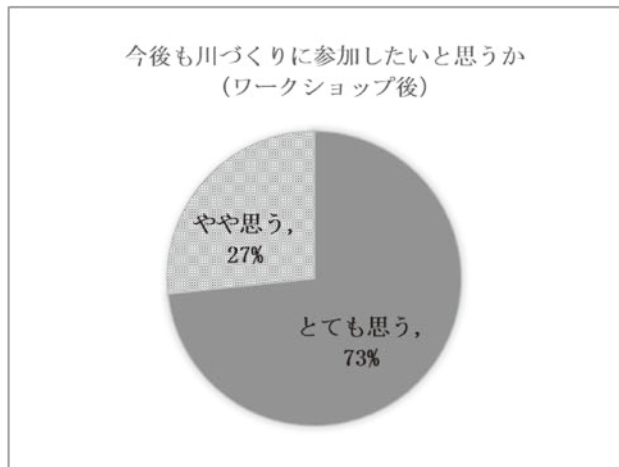


図5 今後も川づくりに参加したいと思うか (n=15).
回答の選択肢は「とても思う」「やや思う」「どちらでもない」「あまり思っていない」「全く思っていない」の5つを用意したが、「どちらでもない」「あまり思っていない」「全く思っていない」と回答した人は0人だった。

を子どもたちに伝える活動、そして親子向けの川遊びイベントを行った。これらの活動が地域住民に浸透するように、川づくり通信 vol.3, vol.4 としてまとめ、自治区住民に回覧した。

□川づくり学習会 ① 2022年5月29日 参加者19人、
② 2022年10月23日 参加者14人、③ 2023年2月25日 参加者10人

第1回の学習会は、水制工、落差工等の河川修繕で施工した石組みの役割、川幅と生物の関係、川辺の草刈りをテーマとし、広沢川で実際の現場を見ながら矢作川研究所の土木系職員や近自然工法の技術者から川づくりの基礎を学んだ(図6)。参加者アンケート(18人回答)では、落差工や水制工、置石の役割を学習会前に知っていたのは半数以下(落差工:知っていた2人,知らなかった16人,水制工:知っていた2人,知らなかった16人,置石:知っていた4人,知らなかった14人)だったが、学習会を通してその役割を学べたようである(自己判断での理解度の平均:落差工85点,水制工84点,置石83点(100点満点))。「この学習会で初めて知ったこと」として、「川の流れと生態系の変化」「魚の住みやすい川の構造」「草の種類によって生長点が違うこと」などが挙げられた。また、学習会に参加して川づくりに関心を持ったかどうかについては「とても持った」12人、「やや持った」6人(図7)であり、今後も川づくりに参加したいと思うかどうかについては「とても思う」11人、「やや思う」7人だった(図8)。学習会に参加した全員



図6 川づくり学習会の様子。

が川づくりに参加する意欲があり、その理由として「生態系の維持には大切と思った」「大切な自分たちの川だから」「今後の川がどのように変化するのが楽しみです」等の回答があった。

第2回の学習会は、出水期を経た広沢川において土砂の溜まり具合を観察し、農業用に取水するための堰板を外して、堰上流の河床に堆積する土砂を流す試みを行った。生きものがすみやすい多様な環境の創出につながる川づくりや、水際を刈り残して生き物が隠れやすいようにする草刈りの工夫について学び、参加者は活発に意見交換を行っていた。

第3回の学習会では、出水の影響により石の配置が変化していた石組みの補修、水深を保つための土砂の掻き出しを行う等、自らの手により川づくりを実践した。また、この年度に浚渫したばかりのエリアを見学しながら、子どもたちが安全に遊べる場づくりについて話し合った。

□広沢川の歴史を子どもたちに伝える会 ① 2022年5月25日 参加者3人、② 2022年6月22日 参加者3人、
③ 2022年11月30日 参加者3人、④ 2023年3月13日 参加者5人

この会は、「広沢川思い出マップ」に盛り込まれた情報を、次世代に伝えてはどうかという矢作川研究所研究員の声に賛同した猿投町まちづくり協議会の会員有志により企画された。

第1回は、20年前の2002年9月13日に行われた地域住民への聞き取り調査(豊田市矢作川研究所, 2003)を読みなおし、当時の水車の位置図なども見ながら、かつてあった水車の存在と、水車の持ち主について話し合った。故人を含むたくさんの住民の名前が挙がり、思いを馳せる時間となった。

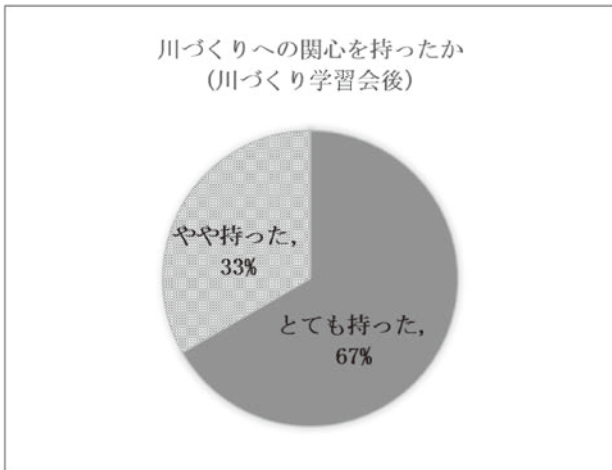


図7 川づくり学習会に参加した後の川づくりへの関心 (n=18).

回答の選択肢は「とても持った」「やや持った」「どちらでもない」「あまり持っていない」「全く持っていない」の5つを用意したが、「どちらでもない」「あまり持っていない」「全く持っていない」と回答した人は0人だった。

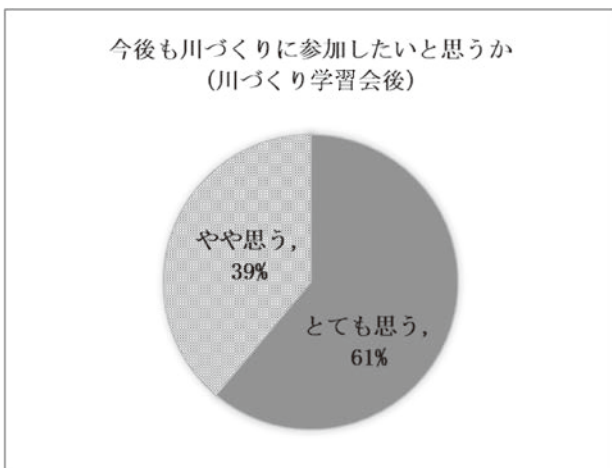


図8 今後も川づくりに参加したいか (n=18).

回答の選択肢は「とても思う」「やや思う」「どちらでもない」「あまり思っていない」「全く思っていない」の5つを用意したが、「どちらでもない」「あまり思っていない」「全く思っていない」と回答した人は0人だった。

第2回は、第1回の資料に加え、近隣地域の水車に関する資料、土地改良についての資料、「広沢川思い出マップ」を見ながら、子どもたちに何を、いつ伝えるか、について話し合った。その結果、「水車、川の変化、川遊び」について、子ども会のクリスマス会の際に時間をもらって伝えることを決定した。また、広沢川の源流についても地図を見ながら見当をつけた。

その後、第3回では、メンバーが作成したスライド資料を使って、クリスマス会の会場でリハーサルを行い、資料の修正すべき点などを話し合った。そして、2022



図9 水車と看板の整備。

年12月4日にクリスマス会に参加した子ども会の児童に対してプレゼンテーションを行い、地域の盛業であった石粉を作る水車の動力として広沢川が欠かせない存在であったことを伝えた。この会の活動に関連して、猿投町まちづくり協議会が川沿いに放置されて荒れ果てていた金属製の水車と周辺の整備、水車を紹介する看板の設置を行った(図9)。

第4回では、この1年の活動を振り返った。「クリスマス会で子どもたちに水車のことを伝えられてよかった」「水車の整備などについて、よその人に楽しんでもらうのもいいが、地元の人にまず楽しんでもらうことが大事」などの意見が出た。

□川遊びイベント「広沢川で遊ぼう」 2022年7月31日 参加者43人

親子向けの川遊びイベントは、事業1年目から計画しては中止、を繰り返してきたが、3年目にして初の開催となった。猿投町まちづくり協議会と猿投自治区の共催で、子ども会の協力を得て実施した。開催に当たっては、猿投町まちづくり協議会が、事前の草刈りや当日の大型テント設営、仮設トイレの設置、蜂の巣の除去、「広沢川水族館へようこそ」などの掲示物等の準備を行った。イベントの周知や参加者の募集は子ども会や自治区を介して行われた。矢作川研究所は生き物の捕まえ方の指導、捕まえた生き物や川の流れについての解説等の専門的な部分のみを担当し、川遊びが将来的に地域主体のイベントとして継続できるような役割分担をした。

当日は、参加者を2グループに分けて、浚渫と石組みが行われたエリアで笹船を作って多様になった川の流れを確認したり、広沢川の生き物を採集するガサガサを体験したりした(図10)。また、捕まえた生き物は全て集



図 10 川遊びイベントの様子。

約して即席の広沢川水族館を作成した。参加者からは、「楽しかった」「水深が浅くて安心して子どもと遊ぶことができた」「いろんな生き物がいること、意外と遊びやすいことを知った」といった声が聞かれたことから、川づくりによって変化しつつある広沢川を体感する機会を創出することができたと考えられる。

イベント終了後のふりかえりでは、暑い真夏を避ける実施時期の検討や、現地にある竹藪の影を利用すれば簡易テントでよいといった準備の省力化等の次回の開催に向けての改善意見が出された。一方で、「川の生き物の隠れ家となる水際の植生を事前の草刈りで刈ってしまった」「生き物を捕まえたことを褒められたり、自慢したりしたい子もいるので、水族館に入れてくれる子は持ってきてくださいとしたほうがよかった」「時間や行動の進行管理をする人がよく分からなかった」「今回的人数程度ならみんな同じスケジュールでもよかった」等といった課題も挙げられた。

■ 2023 年度

事業 4 年目は、地域住民が川と関わる機会の定着化を図るため、川遊びイベントを継続して開催したことに加えて、新たな試みとして広沢川の源流探しを行った。

□川遊びイベント「広沢川で遊ぼう」 2023 年 7 月 30 日 参加者 18 人

猿投町まちづくり協議会が事前の草刈りから当日使用するテント等の準備を担い、矢作川研究所は生き物の捕まえ方や広沢川にすむ生き物の解説等で協力した。前年度の浚渫の影響で、眼鏡橋上流の広場前の川幅は広く、水深は浅くなり、生き物採集に適した水際植生もまだ発達していなかったため、まだ浚渫していない下流側の区

間で生き物採集を行った。

広沢川の魚類としてはカワムツ *Nipponocypris temminckii*、ホトケドジョウ *Lefua echigonia*、カワヨシノボリ *Rhinogobius flumineus* の生息が安定して確認されるが、この日もこの 3 種類が捕まえられていた。捕まえた生き物の名前や生態などの解説をする前に「今日捕まえた魚は何種類いると思うか。① 3 種類② 5 種類③ 10 種類。」という三択クイズを出したところ、10 種類と答える子どもがほとんどで、正解は 3 種類と教えると、がっかりしたような子どもが多く見られた。事前に猿投町まちづくり協議会から「単に生き物の説明をするだけでなく、広沢川という身近な環境の全体に子どもが目を向けられるような説明をしてほしい」と依頼があったこともあり、「3 種類と聞くと少なく感じるかもしれないが、20 年前の調査結果とほとんど変わっていない。種類の多い少ないではなく、いつ来てもこの 3 種類を確認できるということは広沢川らしい環境が保たれているということである。」と説明した。

□源流探し 2023 年 11 月 8 日 参加者 5 人

前年度に行った、広沢川の歴史を子どもたちに伝える会において、広沢川の源流について話題となったことを受け、実際に川を遡って源流を探すことになった。「地元では井戸杉が広沢川の源流だという声が聞かれるが、別の場所にあるという人もいる」という声が聞かれたが、先に述べたように、広沢川の上流には、広沢川と鷺取川の 2 河川があり、井戸杉は鷺取川のほうにある。鷺取川の源流である井戸杉（便宜的に源流 A と呼ぶ。）ではないほうの源流（同様に源流 B と呼ぶ。）を知るという人の案内で、広沢川を遡って源流 B を確認したのち、猿投山山頂を経由し、東の宮から西の宮へ行く途中で鷺取川の源流 A を確認して下山するという行程をとった。なお、川の源流に近くなると水は地上を流れたり地下を流れたりするため、最初の一滴にイメージされるようなピンポイントな位置を知ることは困難である。どちらであっても、広沢川の源流は猿投山であることに間違いはないのだが、今回の源流探しでは、それぞれの川において水が視認できた最上流の場所を源流とすることにした。

広沢川を遡った源流 B は、山の斜面が広い範囲で垂直に削れたようになっており、その部分から水がしみ出して、小さな池が形成されていた。鷺取川の源流 A は、確かに井戸杉（豊田の名木第 133 号。3 本杉とも呼ばれる。）のそばにあり、スギ *Cryptomeria japonica* の根本

付近の地表から水が湧き出している様子が見られた。古くからそう呼ばれていたであろう井戸杉の名称と違わぬ風景であった。今回、確認したそれぞれの源流の標高を地形図で読み取ると、鷲取川の源流 A が 559 m、源流 B が 558 m であり、源流 A のほうが高い位置にあった。

広沢川から遡っていくルートは、比較的傾斜が緩やかであったため、子ども向けの広沢川の啓発イベントとして源流探しを開催したいという意見が参加者から出された。

■ 2024 年度

5 年間の事業期間の最終年度を迎え、草刈りのポイントとなる植生の管理についての学習会を行ったり、恒例化してきた川遊びイベントを継続開催したりして、翌年度からの地域主体での川づくりへとスムーズに移行できるように取組を進めた。

□川づくり学習会 2024 年 5 月 26 日 参加者 20 人

地域主体での川づくりを進めていくために、日常管理上で大きなウエイトを占める植生管理についての学習会を行った。まずは、猿投町まちづくり協議会と矢作川研究所が一緒につくった未来希望図を再度確認し、その実現に向けて、土砂の溜まりにくい川づくりのためには河川内の草刈り、特にツルヨシ *Phragmites japonica* の抑制が重要であることを説明した。その後、実際にツルヨシを抜き取る体験を実施した。浚渫直後の場所に再び生えてきたツルヨシは水際に沿って地下茎を伸ばしていて、比較的抜き取りも容易だったが、既に地中で複数のツルヨシの地下茎が複雑に伸びているところでは、抜き取りは困難だった。そのような状況の中、矢作川研究所から持ち物は長靴と軍手だけでいいと伝えていたが、日頃から畑仕事や地域の環境整備等も行っている猿投町まちづくり協議会の会員たちはいつの間にか大きな鍬やスコップを持ってきて作業していた。

□川遊びイベント「広沢川で遊ぼう」2024 年 8 月 4 日 参加者 23 人

前年度と同様に、猿投町まちづくり協議会と猿投自治区が共催し、矢作川研究所が協力するという体制で川遊びイベントを実施した。この時点では、2022 年度に浚渫した広場前の区間に、ミゾソバ *Persicaria thunbergii* やクレソンとして知られるオランダガラシ *Nasturtium officinale* 等の水際植生ができており、生き物採集が可能な状態になっていた。猿投町まちづくり協議会からは

前年度に続き「生き物だけではなく、広沢川の環境や歴史を参加者に知ってほしい」という要望があったため、広沢川生き物図鑑と未来希望図を両面印刷してラミネートしたものを配布したり、「広沢川の歴史を子どもたちに伝える会」で収集、作成した水車の資料を掲示したりした。捕まえた生き物の解説においても、水生昆虫の種類から広沢川が溪流的な環境を有することや、魚種数が高河川と比べて少ないのは広沢川が河川の上流部であること等、広沢川の特徴を意識して行った。参加者アンケートでは、「これまで広沢川で子どもと川遊びをしたことがあったか」という問いに対して、回答した 8 組のうち無回答 1 組を除く 7 組が「あった」とした。また「散歩や川遊びのために、また広沢川に来たいと思うか」という問いには、「思う」が 7 組、「どちらかといえば思う」が 1 組となり、「思わない」「どちらかといえば思わない」といったネガティブな回答は無かった。川遊びイベントも 3 回目となり、地域住民にとって広沢川は遊べる川であるという認識が定着してきたのかもしれない。

□水辺愛護会設立へ

これまで矢作川研究所と共働で事業を進めてきた猿投町まちづくり協議会から、事業期間終了後は水辺愛護会（豊田市矢作川研究所ホームページ）として広沢川の活動を継続していきたいと打診があった。水辺愛護会の制度を所管する豊田市河川課に確認したところ、制度の要綱や活動の実績等を踏まえて水辺愛護会としての団体登録に支障がないと判断された。その後、猿投町まちづくり協議会とは異なる団体として、2025 年 5 月 10 日に盛大な設立総会を開催し、広沢川猿投水辺愛護会として新たなスタートを切った。

4. 考察

広沢川のふるさとの川づくり事業は、地元発意で始まり、猿投町まちづくり協議会を中心に行政との共働で進められた。広沢川での取組について、岩本川の事例との類似性や相違性を交えて述べる。

先行事例である岩本川では、ワークショップ開始から未来希望図作成まで古巣水辺公園愛護会の会員が多く参加したものの、その後の川づくり活動は、扶桑町と百々町で小学生の子どもを持つ親が中心に行い、そのメンバーにより岩本川創遊会という新しい団体が結成され、川づくりを担っている（吉橋・山本、2019）。一方で広沢川では、未来希望図作成までの取り組みも、その後の

活動も住民参加のすべての活動を猿投町まちづくり協議会が中心になって実施した。矢作川研究所としては、広沢川においても岩本川同様に親世代の活動参加をもくろんでいたが、コロナ禍で子どもへの感染リスクが懸念され、身近な川に関心を持つための最初の機会である川遊びイベントが何度も中止になり、親子を川に呼ぶことができなかったために、猿投町まちづくり協議会を主体としたまま事業が進んでいったことが岩本川との違いのひとつである。

また、猿投町まちづくり協議会では、猿投山の登山道や駐車場の整備など様々な活動が以前から行われていて、歴史ある猿投町の地域資源の保全等に取り組んでいる。なぜ、ふるさとの川づくり事業に応募したのだろうか。

当時猿投町まちづくり協議会の会長だった T 氏はふるさとの川づくり事業に応募してきた際に、「広沢川の多自然（型）川づくりが行われていたところに自治区長を務めており、そのころから、広沢川を生かしたまちづくりをしたいと考えていた。」という話を聞かせてくれた。地域住民の憩いの場や子どもの遊び場としての活用を考えていたようである。

また、その後に猿投町まちづくり協議会会長を務め、広沢川猿投水辺愛護会の初代会長を務める K 氏は、市民連携の川づくりをテーマにした矢作川研究所シンポジウムの場で、次のように述べている（豊田市矢作川研究所、2025）。

「地域への愛着というのはやっぱり子どもたちに植えつけたいということで、川を使ってやるということは非常に意味がある、効果のあることだと思っていましたので、（中略）、その川で魚を捕まえたりして、だったら川に遊びに行くという機会をつくっていくということにちょっと貢献できたのかなと思ってるわけであります。（中略）どうしても子ども会の保護者の親はあまり川に連れていきたくないみたいなことを言うものですから、ちょっとその辺のところを上手に仕掛けしながら、子どもたちに何か地域の愛着というのを持ってもらえるような、広沢川を通じてということ。また広沢川は猿投山とつながっているところがありますので、（中略）広沢川源流を訪ねたりとかということを実践してきました。今度、子どもたちを連れてそういうことを夏休みとかいろいろな時に展開しながら、川に対する思いというのをきちんと持たせるような、そんな活動を続けていきたいなと思っ

ております。」

こうした想いが形になったものが、「広沢川の歴史を子どもに伝える会」ではないだろうか。猿投山麓には、愛知県、岐阜県で盛んな陶磁器づくりの原料となる石粉を生産するトロミル水車がたくさんあったこと、その水車の動力として川は欠かせないものであり、重要な産業を支えていたことを資料にまとめて子ども会のクリスマス会で発表した。さらに、広沢川沿いで荒れ果てていたトロミル水車周辺の整備を行い、現在では当時の面影を残す遺産として来訪者が見られる（ツーリズムとよたホームページ）ようにしたこと等、その行動力にも驚かされる。

子どもを川に連れていきにくいと感じている親世代に代わるようにして、祖父母世代である猿投町まちづくり協議会の会員が孫世代の子どもたちを身近な川に呼び込み、川を介して楽しみながら地域への愛着を持たせようとしているのである。これらのことから、広沢川のふるさとの川づくり事業への参画は、身近な川を地域資源と捉えた、まさにまちづくり活動の一環であり、今の子どもたちが地域に愛着を持つことで、自分たちが育ってきた地域の未来を託していきたいという想いがあるのかもしれない。

先に述べてきたように、子どもが川に関わることを目的のひとつとしているのは岩本川の事例と同様である。岩本川では、子どもによる川の利用を図るため、川から約 500 m の位置にある平井小学校に働きかけた結果、岩本川を活用した授業が毎年行われるようになった（吉橋・山本、2020、2023）。筆者らが行った保護者アンケートの回答から、授業の後に親子で岩本川へ遊びに行った人が約 10% いた（山本・吉橋、未発表）ことが明らかになった。つまり、授業で川に行くことで、子どもが川を体験するだけに留まらず、保護者を川に呼び込む効果も期待できる。岩本川創遊会の面々は「川が子どもたちに活用される姿を見るとやりがいになる」と口を揃えた。子どもが遊べる川を目標にすることで、草刈りや自然再生等の川づくりは手段となり、大変な作業も楽しくできているという。

広沢川でも小学校による活用を検討したが、近隣の加納小学校は広沢川から約 1,100 m と少し距離があること、何より小学校のすぐそばに加納川、籠川が流れており、水生生物調査等の授業がすでに行われていたことから、小学校の授業での活用は困難だと判断した。そのため、イベント的に広沢川に人を呼ぶ機会は 1 年に 1 回の夏の川遊びだけとなっている。そこで、K 会長もすでに

述べているが、源流を探す、トロミル水車を学ぶ等のメニューの実現により、子どもや親世代を広沢川に呼びこむ機会が増えることを期待している。

ハード整備も含め行政が積極的に関わる事業期間は終了したが、広沢川をふるさとの川にしていくのは、地域主体の活動が進んでいくこれからが本番である。川づくりを継続的に行っていくために、広沢川では水辺愛護会設立という手段を選んだ。猿投町まちづくり協議会による様々なまちづくり活動の一環としてではなく、広沢川に特化した活動団体を作ったことが、これからの活動に対する決意の現れであるように感じている。また、水辺愛護会の登録団体となることで、豊田市河川課、矢作川研究所といった行政との関わりを明示的に維持する意味合いもあるかもしれない。筆者らにとっても、広沢川がふるさとの川として地域に愛される川となっていく様子を引き続き見守っていく責任を感じているし、岩本川とは異なる広沢川ならではの地域性を生かした活動の発展が楽しみでならない。

5. おわりに

筆者らは、既報（吉橋・山本，2019）において、ふるさとの川づくり事業の要素を、①地元の尊重、②子どもの川遊びを活動の核とする、③住民と行政が将来像を描き、住民が川づくり団体を立ち上げ、自立していくというステップを踏む、④これらを川遊びや川づくりの試行錯誤をしながら進める、等に整理した。そして、他の河川へ事業展開する際には、これらの要素を押し付けず、その地域ならではの固有性が優先される、と述べた。

広沢川におけるふるさとの川づくり事業においても、これらの要素を満たす形で進めた結果、未来希望図作成の過程で子どもが遊べる川を目標として、ワークショップ、川遊び、川づくり学習会を通して繰り返し広沢川に関わることで関心が高まり、水辺愛護会の設立にまで至った。さらに猿投山やトロミル水車といった地域の資源を生かした活動の礎も生まれた。

岩本川に続き広沢川でも、ふるさとの川づくり事業によって、地域住民にあまり関わりがなかった身近な川が意識されるようになり、地域に愛される川への一步を踏み出したことから、本事業は身近な川という地域資源への関心や保全意識の向上そして地域愛着の醸成に有効な取組であると考えられる。

謝辞

広沢川猿投水辺愛護会の K 会長、T 氏はじめ会員の皆さん、猿投町まちづくり協議会そして猿投自治区の皆さんの関わりがなければ、広沢川でのふるさとの川づくりは進められなかった。また、岐阜大学環境社会共生体研究センター長の原田守啓教授には矢作川研究所シンポジウムにおいて広沢川での事業開始にあたり数々の有益な助言を頂いた。また、豊田市河川課、猿投支所そして矢作川研究所職員にはそれぞれの立場で事業に関わっていただいた。ここに記して感謝申し上げる。

引用文献

- 水辺の小さな自然再生研究会ホームページ：水辺の小さな自然再生とは？. <http://www.collabo-river.jp/>（2025 年 8 月 8 日閲覧）。
- ツーリズムとよたホームページ：猿投七滝、広沢川の水車. <https://www.tourismtoyota.jp/spots/detail/24/>（2025 年 8 月 8 日確認）。
- 豊田市ホームページ：第 8 次豊田市総合計画、基本施策 VI 環境. https://www.city.toyota.aichi.jp/_res/projects/default_project/_page/001/018/341/koko/12.pdf（2025 年 8 月 8 日閲覧）。
- 豊田市矢作川研究所（2003）普通河川広沢川自然環境調査報告書。
- 豊田市矢作川研究所（2025）2023 年度豊田市矢作川研究所シンポジウム記録 市民連携で進める川づくり。矢作川研究，29：87-109。
- 豊田市矢作川研究所ホームページ：とよたの水辺愛護会. <https://www.mizube-aigo.yahagigawa.jp/>（2025 年 8 月 8 日閲覧）。
- 豊田市役所地域振興部猿投支所（2017）猿投山・籠川ガイドブック。
- 吉橋久美子・山本大輔（2019）地域住民と行政による小川の自然再生「ふるさとの川づくり事業」の記録。矢作川研究，23：77-88。
- 吉橋久美子・山本大輔（2020）子どもが描いた「川と生き物の絵」は川学習の前後でどのように変化したか。矢作川研究，24：55-67。
- 吉橋久美子・山本大輔（2023）川の生物に対する児童の捕獲体験と関心との関わりについて—豊田市の岩本川での事例報告—。矢作川研究，27：33-41。

（豊田市矢作川研究所
〒471-0025 愛知県豊田市西町 2-19 豊田市職員会館
1 階）



75



付図2 広沢川思い出マップ（上：外面、下：中面）.

WE LOVE 広沢川未来希望図

とよた人も生き物も生き生き 川暮らし

発行：猿投町まちづくり協議会 0565-***-**** 豊田市矢作川研究所 0565-34-6860

子どもも大人も安心して遊べる、
生き物がすみやすい川へ

ふるさと川の川づくりが進んでいます (水辺の小さな自然再生)

猿投山を源流とする広沢川で、住民と行政の共働による「ふるさと川の川づくり」事業が行われています。

住民ワークショップ(右記)では、広沢川には、かつて、石粉(陶磁器の原料)づくりや、米つきのための水車がまわる風景があったこと、子どもたちが魚を採り、大人に橋を作ってもらって遊んだ川だったことがわかりました。今も農業用水の水源として、また、生き物のすみかとして重要な役割を果たしています。

今後は土砂の溜まりにくい、遊びやすい、生き物がすみやすい川を目指すことになりました。住民が日曜大工的に川に手を入れる機会を作っていきますので、なにかとご参加ください。

※川面に溜まった土砂を防災のために取り除く浚渫工事をきっかけにして、住民と市で川の力を活かし、育む事業。

写真：水車小屋(幸屋)が2軒見える。新築の人物は留置場のあそび向うにこのあたり(旧猿投町・現代市街)。



将来イメージ

ワークショップで川の未来を描く

猿投町まちづくり協議会・猿投町自治会・子ども会と矢作川研究所でワークショップを3回行い、この「未来希望図」を作成しました。広沢川では2003年頃から多自然川づくりが行われ、地域の方々により川辺の草刈や花の手入れなどが行われてきました。今後は川の手入れも含めた「守り」を続け、子どもも大人も川に親しみ暮らしていただけるまちにしようという方針となりました。



①川の思い出を語ろう
2020.01.24



②川の未来をみんなで描こう
2020.04.26



③未来希望図で具体化しよう
2021.10.29

広沢川のいきもの

ニホンカワトンボ



15cmくらいまで大きくなるよ。

カワムツ



子どもに人気。実は外来種。広沢川にはいつかいるのかな。

アメリカザリガニ



里山環境の代表種。害さは苦みみたい。すんぐりしたドジョウだよ。

ダビドサナエ



サワガニ



ホトケドジョウ



コシボソヤンマ



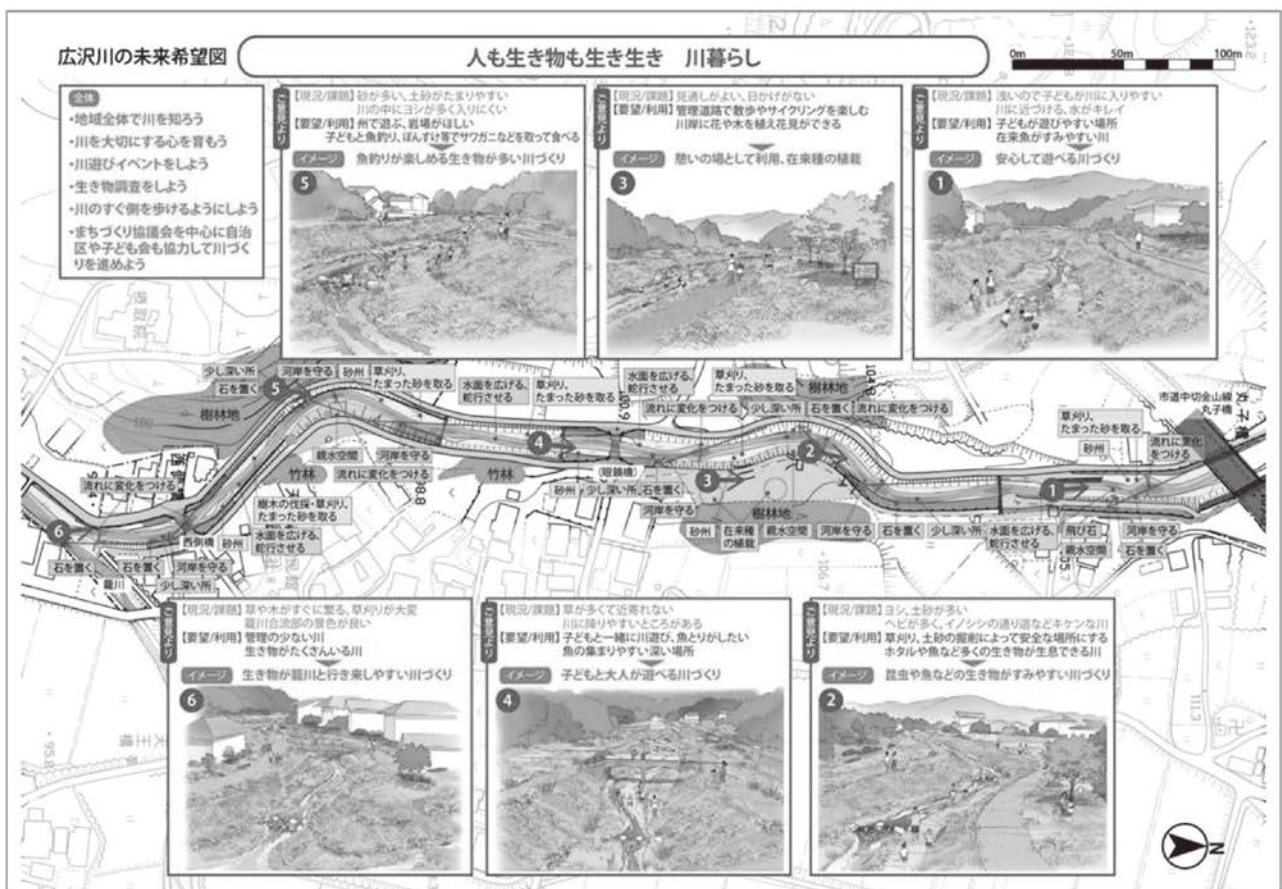
吸盤のひででくっつく。オスが卵を守るよ。

カワヨシノボリ



2019年度	2020・2021年度	2022・2023年度	2024年度～
<p>●住民ワークショップ ・昔の川の姿と課題 ・今の川の姿と課題 ・めざす川の姿と活用</p> <p>●川の思い出・現状・将来像の共有</p> <p>●川遊び体験会※ 自然環境の把握 川への関心喚起</p> <p>●事業等の整理</p> <p><small>※自然環境・子ども会との共に実施するも、コロナにより順延の可能性がある。大人のみの(2020)は実施しない(2021)</small></p>	<p>●整備イメージの作成 目指す姿の提示 活動の促進</p>	<p>●川づくり学習会 川づくり体験会 川遊び体験会 川への関心喚起 愛着の醸成</p>	<p>●川づくり・川遊び体験会 愛着の醸成</p>

2022年3月発行



付表 1 広沢川ふるさととの川づくりの取組一覧.

2019年度 (令和元年度)		人数
9月1日	ふるさとの川づくり事業参画団体を広報とよた9月号で公募	—
9月13日	猿投町まちづくり協議会から応募、その後、ヒアリング実施	—
11月1日	次年度以降の広沢川での事業開始について行政側での内部決定	—
12月16日	今後の予定の打合せ (協議会、猿投支所、研究所)	—
2月16日	事業説明会	—
3月頃	(協議会、自治区、近隣住民、近隣営農者、市議、河川課、研究所)	—
2020年度 (令和2年度)		—
7月7日	事業スケジュール打合せ (協議会、猿投支所、研究所)	—
7月13日	川遊び打合せ (協議会、研究所)	—
7月31日	川遊び中止打合せ (協議会、研究所)	—
8月16日	川遊びイベント「広沢川で川遊び！」 ※コロナ対応で中止 大人だけの広沢川探検として、生き物採集	約10人
8月19日	協議会から昔の写真等を手入	—
9月9日	資料回覧打合せ (協議会、研究所)	—
9月頃	広沢川探検マップ、昔の川の思い出や写真の募集チラシを自治区回覧。	—
10月6日	平井小学校の岩木川学習の視察 (協議会、研究所)	—
11月21日	ワークショップその1「広沢川の昔の思い出を語ろう」 (協議会、自治区、研究所)	13人
12-1月	一部区間の浚渫	—
1月頃	広沢川思い出マップを自治区回覧。	—
2021年度 (令和3年度)		—
4月8日	事業スケジュール打合せ (協議会、猿投支所、研究所)	—
4月25日	川遊び打合せ (協議会、自治区、子ども会、研究所)	—
6月8日	ワークショップ打合せ (協議会、猿投支所、研究所)	15人
6月26日	ワークショップその2「川の未来をみんなで描こう」→いっしょにあわせ (協議会、自治区、研究所)	—
7月6日	川遊び打合せ (協議会、自治区、研究所)	—
7月27日	川遊び現地打合せ (協議会、猿投支所、研究所)	—
8月10日	ドローン撮影	—
8月12日	川遊び現地打合せ (協議会、猿投支所、研究所)	—
8月22日	川遊びイベント「広沢川で川遊び！」 ※コロナ対応で中止。	親子43人 (申込)
10月7日	ワークショップ打合せ (協議会、猿投支所、研究所)	—
10月頃	川づくり通信vol.1.1を自治区回覧	—
10月14日	川の中を撮影	—
10月23日	ワークショップその3「未来希望図で具体化しよう」→かわぐらし ドローン映像や川の中の映像を視聴 (協議会、自治区、研究所)	16人
11-3月	丸子橋周辺の浚渫、石組み施工	—
1月13日	事業打合せ (協議会、研究所)	—
3月頃	川づくり通信vol.1.2を自治区回覧。未来希望図が完成	—
2022年度 (令和4年度)		人数
4月23日	事業スケジュール打合せ (協議会、自治区、子ども会、研究所)	—
5月25日	広沢川の歴史を子どもたちに伝える会① 20年前の聞き取りを確認	3人
5月29日	川づくり学習会① 落差工の石組み、川づくりの効果	19人
6月22日	広沢川の歴史を子どもたちに伝える会② 水車と猿投の土地改良区圃場整備について	3人
6月25日	川遊び打合せ (協議会、自治区、子ども会、研究所)	—
7月31日	川遊びイベント「広沢川で川遊び！」 川の流れの体験、生き物採集、広沢川の生き物の解説	親子43人
10月頃	川づくり通信vol.1.3を自治区回覧	—
10月23日	川づくり学習会② 堆砂状況の確認、草刈りの工夫	14人
11月30日	広沢川の歴史を子どもたちに伝える会③ 「水車、川の形の変化、川遊び」を伝えることを決定	3人
12月4日	広沢川の歴史を子どもたちに伝える会 子ども会のクリスマス会にて発表	—
1-3月	取水口下流～眼鏡橋周辺の浚渫、石組み施工、階段施工	—
2月25日	川づくり学習会③	10人
3月13日	落差工の石組み、浚渫場所の見学 広沢川の歴史を子どもたちに伝える会④ 活動の振り返り	5人
3月頃	川づくり通信vol.1.4、広沢川未来希望図を自治区回覧	—
2023年度 (令和5年度)		—
5月12日	事業スケジュール打合せ (協議会、自治区、研究所)	—
7月30日	川遊びイベント「広沢川で川遊び！」 生き物採集、広沢川の生き物と環境の解説	親子18人
11月8日	広沢川の源流探し 猿投山登山しながら広沢川側と鷹取川側の最上流部を確認	5人
1-3月	西側橋周辺～籠川合流周辺の浚渫	—
2024年度 (令和6年度)		—
4月17日	事業スケジュール打合せ (協議会、研究所)	—
5月11日	川づくり学習会と川遊び打合せ (協議会、自治区、研究所)	—
5月26日	川づくり学習会④ ツルヨシの抜き取り	20人
8月4日	川遊びイベント「広沢川で遊ぼう！」 生き物採集、広沢川の生き物と環境、水車等の解説	親子23人
1-3月	眼鏡橋下流～西側橋上流の浚渫、石組み施工	—
2025年度 (令和7年度)		—
5月10日	広沢川猿投水辺愛護会設立総会	—
5月頃	川づくり通信vol.1.5を自治区回覧	—